
雨垂れの誘い

霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨垂れの誘い

【Nコード】

N9716K

【作者名】

霞

【あらすじ】

大都市から遠く離れた、山間の小さく長閑な村。

そんな村に突然やって来た、黒塗りの高級車。

車内には、この村を大きく変えてしまう《モンスター》が詰め込まれていた…

長閑な昼下がり（前書き）

初めまして。

お立ち寄り頂きましてありがとうございます。

これは、別サイトで随分前に載せた物をタイトルから大幅改稿して載せて行こうと思っております。

原型が無くならないかしら…

不安であります。

まあ、それもまた良し。

ポチポチ進めますので宜しくお願い致します。

では、いざ…

長閑な昼下がり

――19**年9月――

夏の間、散々肌を虐め抜いた日射しが幾分和らぎ、サラサラと涼やかな風が緑豊かな山々から、麓の小さな村へと降りていく。

その麓の村役場横に、大きな櫟の木がある。

今、調度その大きな日陰には、2人の男女が役場内から持ち出したパイプ椅子を並べ、だらけた様子でもう、小一時間ほど前から座っていた。

3

平和である。

今のところ。

「はあ~~~~」

今日何度目かの特大溜め息をついて、30代半ば幸薄そうな顔付きの女は、額の汗を忙しく拭ぐっている、中年の男を睨み付けた。

「何？」

中年男は、相変わらず自分を睨んでいる相手に対し何処かおどおどしながら言った。

この頼り無げな中年男。

実はこの村の村長：

そして、そんな村長を睨み付けている幸薄女は、村長のたった2人しかない部下の1人。

もう1人居るはずの男の部下は、自宅の雌牛ジュリーが産気付いたと連絡があり、スタコラ早退してしまっていた。

「いいなあ、家の牛も産気付かないかなア」

幸薄女は、村長を睨むのを辞め、そっぽを向きながら呟いた。

「君ん家、牛飼ってないでしょ。」

へへっと笑いながら村長は、自分の首の汗を拭う。

「本当に、来るんですかア？もう、かなりこうして待ってますよお？」

間の抜けたしゃべり方をする幸薄女は、村長に向き直りながらまた

睨む。

どうやら、元から目付きが悪いらしい。

「来るでしょう。だって、向こうから指定してきた日時だもの。お偉いさんは、忙しいから、遅れてるだけですよ…」

村長は、ニコニコしながら自ら頷く。

「本当に、今日の13時に到着って言ってたんですかあ？ちゃんとか合ってますう？」

幸薄女は、村長にズイッと詰め寄る。

「そんな大事な事、間違えるはずないでしょ？来ますよ、こうして待ってれば、必ず。ねっ！」

村長は、幸薄女の視線を避けながらなだめた。

「じゃあ、連絡をもらった時のメモ、見せて下さいよう？」

幸薄女は、村長に手を突き出す。

「メモ？あるけど…向こうの事務所の番号しか書いてないよ？」

村長は、幸薄女の手にもメモを渡す。

「確認します。」

そう言って、幸薄女はメモをチラッと見ると、また溜め息を付いて立ち上がり、役場へ戻り出した。

「そんなに溜め息ばかり付いてると、幸せが逃げちゃうよ？ 先方に失礼の無いようにね？」

村長は、歩き出した幸薄女の背中に向かって言う：

言われた幸薄女は般若の如く陰相で瞬時に首だけ振り返り、なにも言わずそのまま役場内へ入って行った。

村長は、体をビクッ！とひくつかせ、流れ出た冷や汗を拭うと、また陽炎の立つ道路の先に視線を向けた。

全くの余談だが、

今年54歳バツ無し未だ独身のこの村長、あんな態度の幸薄女の事を密かに想っている…。

Mっ気満載の中年男である…。

憐れなり…。

すると、村長の視界に舗装されない道路の遙か先に、土煙を豪快に巻き上げながら、此方へ向かって疾走する3台の黒塗りの高級車が飛び込んできた。

どうやら、2人が待ちに待った相手がやっと現れた様であった。

村長は慌てふためき、ハンカチを落としたのにも気付かず、
足で幸薄女を呼びに役場の中へ走って行った。
縛れる

長閑な昼下がり（後書き）

読んで下さりました方々、本当にありがとうございます。

皆様方には、読みにくい、解りづらい部分等多々有ったかと思えます。

スンマヘン…

なかなか進みませんね…

次から内容は、大分変わっていくはず…

ボチボチですが。

皆様からの、ご意見・ご感想等頂けましたら大変嬉しく思います。
宜しくお願い致します。

またのお越しを御待ちしております。

モンスター（前書き）

お立ち寄りありがとうございます。

今回少しばかり、雰囲気が変わります。

では…

モンスター

車から降り立った人物は、今この国で最も権力のある政党、国民平和党の幹部、小沢代議士である。

何故、政界の大物が《のほほん》とした小さな村なんぞにわざわざやって来たのか：

理由の一つとして、この村が小沢氏の生まれ故郷と言う事も挙げられる。

しかし、小沢氏の本当の狙いは、ただの帰省ではない。

氏の傍らに立つ第一秘書の鞆には、この大物代議士の思惑と欲望の全てが詰め込まれている。

実際、革製の鞆の留め金は、今にも弾け飛びそうな程限界ギリギリな位置でどうにか止まっている。

小沢氏一行は、大幅に遅れた事を詫びるでもなく、出迎えた村長と幸薄女を一瞥すると、さっさと役場内へと入って行った。

村長と幸薄女は、下げていた頭を上げると顔を合わせて溜め息をつき、ご一行をもてなす為に後について行った。

この日を境に、この村は大きく変わってしまう。

小沢氏は、首都圏と他の大都市を繋ぐ、高速道路建設とそれに伴う土地開発計画案を、村長を始めとする気のいい村民達に提案してきただった。

このままではさほど遠くない未来、廃村という現状のこの村にとって、いかに莫大な利益と人口の増加を及ぼすかを切々と唱えた。

それは、見事な口上であった。

しかし、そのプロジェクトが及ぼす利益は、ただ一つこの村の為にではなく、小沢氏のこれからの政治家としての地位を更に大きく偉大な物とし、

そして勿論、一番大事な小沢氏個人に莫大な利益を産み出す物であった。

人を丸め込み己の欲望の為に人を動かす。

まさに、政治家という名のモンスターと言える。

村民は皆、穏やかな性格の為にあまり気の進まないながらも賛成し、小沢氏の思惑道理全て事が運ぶ事となった。

極一部の反対派もいたが、相手にされなかった。

さて、小沢氏があの日やって来た時、氏は秘書以外の者も一緒に連れて来ていた。

村役場に到着した時、居なかったその者は、役場に向かう途中の小沢氏の生家に下ろされていた。

小沢誠二

小沢氏の1人息子である。誠二は、その日から古くとも立派な父親の生家で、先に来ていた執事と家政婦数名と一緒に暮らし始めた。まだ、9歳になったばかりの小学3年生で、まだまだ両親に甘えたい年頃の誠二が何故、家族と離れて生活する事になったのか…。

小沢氏は、息子に自分の仕事振りを見せてやりたい。

自然に恵まれた土地で育てば豊かな心が育まれ、親と離れて暮らし、いても将来、自分の後継者として、逞しく成長出来るだろう。

と人々に語っていたが、実際のところ、村民の前で開発計画案を演説した日以来、小沢氏がこの村を度々訪れる筈もなく、そんな小沢氏に対して村民から不満が出ない様にカモフラージュとして、誠二をこの地に置いただけの事だった。

モンスター（後書き）

読んでくださいました皆様、ありがとうございます。

筋肉痛が治りませぬ。

ふて寝をしたのに…治りませんでした。
体力の限界です。

今回はここまでっ！

ご意見・ご感想を頂けましたら嬉しく思います。
宜しくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9716k/>

雨垂れの誘い

2010年10月12日06時01分発行